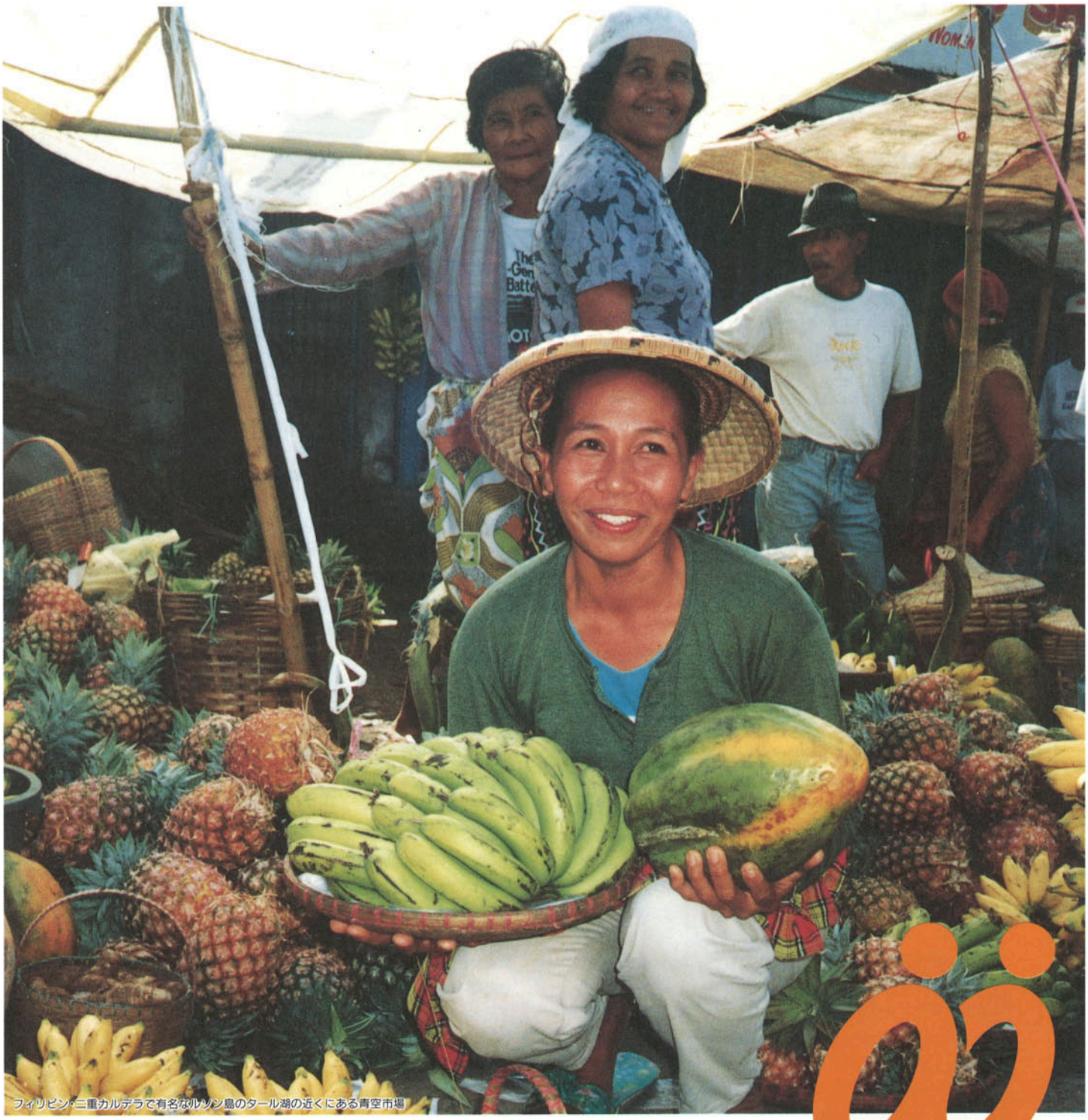
エイジアン・ブリーズ 5号・平成4年(1992年)5月発行・年3回発行

Asian Breeze



フィリピン・二重カルデラで有名なルソン島のタール湖の近くにある青空市場

いま、女性たちは——WOMEN TODAY——……2
女性行政担当官セミナー……3
海外出張報告……4
アジア各国"風"事情……6
フォーラムの窓……7

KFAW

MAY 1992 No.5

いま、女性たちは――WOMEN TODAY――

日本の女性・アジアの女性

アジア太平洋地域経済社会委員会
(ESCAP)社会開発部
「開発と女性」担当社会問題専門官
橋本ヒロ子

日本では、戦後、憲法により男女平等が保障され、それに基づき、順次法律が改正され、女子差別撤廃条約の批准の際、ほとんどの法律が女性差別を残さないように改正されました。日本では、法的平等は、ほとんど確立されたと言えましょう。日本は、アジア・太平洋地域の中でも、男女平等に関する法律の整備状況については、優等生と言えるかもしれません。ちなみに、1991年11月現在で、111か国が、上記条約を批准ないし加盟していますが、アジア・太平洋地域では、わずか15か国に過ぎません。しかも、加盟していても、男女不平等の法律を留保事項として残している国が多いというのが現状です。たとえば、タイでは、女性は、地方の副長官になることはできません。まだ同条約を批准ないし加盟していない国の中には、戦前の日本のように、女性に財産権を認めていない国もあります。

では、日本で実質的平等が確立しているかというと、ご承知のように首をかしげることが多く見られます。他のアジア諸国、特に、女性が経済社会でも意思決定部分にかなり進出している、タイ、フィリピンの女性たちにとって、高等教育を受けた日本女性が、専業主婦に多くなったり、働くとしても条件の悪いパートタイマーに甘んじていることが理解しにくいようです。国際的な会議や交渉の場に、日本からは男性だけが出席するのが常のようです。しかも、私のタイの友人の経験によりますと、彼女が日本の代表者（もちろん男性だけ）と打ち合せを始めようとしましたら、彼らは、彼女と対等に交渉しようとせず、秘書扱いをしたと言います。しかし、彼女と同行した男性とでは話が通じず、結果的には、日本側代表者も彼女と交渉しなければならなかったということですが。

日本の女性の社会的地位は高くないという批判に対して、日本の男性は(時には女性も)、日本の女性は家庭では経済力を握っているのだから女性の地位は高いと抗弁しますし、若い女性の中には、社会的な平等を得るために苦労して仕事を続けるよりも、専業主婦になった方がずっと楽だという見方も多いようです。しかし、「幸せな家庭生活」という枠の中で、「経済的な裏付けのない平等」の意味が本当に分かっているのかと疑問は残ります。このような日本女性の現実を特に弁護するつもりではないのですが、日本女性の社会的地位の低さに対する批判に対して、日本のように完全に近い形で「男は仕事、女は家庭」の性別分業が確立し、しかも、開発途上国の中流以上の家庭でよく見られる家事手伝いを安価に期待できない社会では、女性が男性と同等の待遇を求めて、対等に長時間家庭も省みず働き続けることは、非常に難しいと説明してもなかなか理解しにくいようです。

中高年男性を「ワシ男」と揶揄することも女性運動の一つとなっている日本の女性には刺激的な言葉ですが、「女性に対する暴力」が、この10年間、国際的に大きな問題となっています。1995年に北京で行われる予定の第4回世界女性会議では、重要議題の一つになると思われます。ここで女性に対する暴力とは、夫婦間暴力、アジアの一部の国で見られる結納金が少ないことを理由にした花嫁いじめ・花嫁殺し、夫に先立たれた妻に対する殉死の強制などがあります。また、男子誕生を責ぶゆえの女の子の間引き、近親相姦、レイプ、セクハラ、拘禁中の女性に対する警官等の暴力、ポルノグラフィー、買売春、国際的人身売買等、女性であるがゆえに受けるあらゆる形の暴力を包含しています。

1985年に採択された西暦2000年に向けての「婦人の地位向上のためのナイロビ将来戦略」では、「女性に対する暴力」に特に重点が置かれているとは言えません。10年前にもこれらの問題はあったはずですが、このところ大きく取り上げられているのは、夫婦間暴力のように、これまでプライベートなこととして女性が沈黙していたことを、女性グループ等の支援もあって声を出し始め、顕在化してきたこと、さらに、件数自体も増加し、内容的に凶悪化してきたという実態があります。アジア・太平洋の主な都市には、女性のための救援センター（駆け込み寺）が女性グループ等により作られています。日本にも、滞日アジア女性に対する暴力など、同様の問題がありますが、限られた女性団体以外は、活動に組み入れていないようです。

バンコクで積極的に活動している女性団体は、さまざまな形で虐げられた女性のための救援活動、さらには、そのような女性たちを再び出さないための広報、教育活動をしており、成果をあげています。このような女性団体は、日本の女性団体がバンコク訪問の際、調査するのにちょうどよいモデルだと思い、訪問先として紹介してきたのですが、最近、これらの団体から次のような苦情を聞きます。「日本から女性団体が入れ替わり立ち替わり来て、その都度、いろいろ説明を請われる。日本の女性団体の間の情報交換というのはないのか。その上、全くフィードバックもない。限られた数のボランティアで活動しているので、忙しくて、とてもこれ以上対応しきれない」。

日本女性と、その他のアジアの女性との間のギャップはかなり大きいようです。

ワシ男：定年退職後、何をしてよいか分からず、何でも妻について回る人

女性の地位向上のための行政官セミナー

▲研修生ミーティング

アジア女性交流・研究フォーラムでは、JICA九州国際センターの委託を受けて、3月18日～3月27日に第1回「女性の地位向上のための行政官セミナー」を行いました。

このセミナーは、女性問題の解決に向けて各国の情報を交換するとともに、女性行政のマネージメント能力の向上を図るために開催したもので、アジア・太平洋地域の8か国から13名の女性問題担当行政官が参加しました。

研修内容はWIDの視点からプログラムされたもので、女性行政概論、女性行政プランニング論、「開発と女性」概論を総論とし、保育対策、保健衛生対策、母子福祉対策、女子労働者対策を各論としました。

特に、各論については、講義に加えて視察を行い、実地に女性施策を体験したほか、女性問題の解決に果たすNGOの役割の重要性を踏まえ、女性団体との意見交換会を研修の一つとして取り入れるなど、実践的な研修を行いました。

このほか、京都・広島への研修旅行を行い、京都では日本文化に触れるとともに、広島ではエソール広島(婦人総合センター)、広島平和記念資料館を見学しました。

ここで、このセミナーの締めくくりとして行われた参加者たちの自由討論会での意見を紹介します。

バングラデシュ：文化、慣習、宗教などによって女性に課せられているさまざまなタブーがあり、女性の地位向上の大きな障害となっている。日本での女性施策が自分の国でどのように適用できるか、その方向性を探っていきたい。

ブルネイ：女性問題を扱う局ができたのはまだ5年前で、具体的な結果が出ていない。今回の研修で多くの知識、情報を得ることができた。個人としては、女性局ではなく、総理府人事院にいるので、まず、公務員を対象に施策を適用していきたい。

インドネシア：インドネシアでは、国のガイドラインの中に女性の地位向上について規定しているものの、実施面で問題がある。まずは、知識、教育のレベルを上げることが大切だと思う。

マレーシア：日本のさまざまな施策は、資金が不足しているマレーシアではすぐには適用できない。また、自分の国では、女性問題はすべて中央政府が扱っているが、日本のように地方政府でも女性問題を推進していく必要があると感じた。

パキスタン：日本のレベルまで来るには、長い時間がかかる。自分の国では、子供たちは小学校にさえ行けない状態だ。ぜひ、自分の国に来て、どんな援助ができるか知ってほしい。また、女性問題を解決するためには、NGOとの連携を図ることが重要だ。

パプア・ニューギニア：女性局はまだ新しく、他の省に比べ予算も少なく、他省の協力も十分得られない。これは、女性問題が未だ福祉の一つとして捉えられていることに起因している。

スリ・ランカ：人口の7割が農村地域に住んでいて、経済的にも貧しい状態である。この状態を改善するためには、女性が経済的に自立できるよう自営業等の事業を計画したり、技能の向上、ローンの方法などに関する啓発事業をもっと行うべきである。

タ イ：政策決定のポストは、現在、男性に占められている。女性の地位を向上するためには、まず、男性の意識改革を行うことが必要であろう。今回、具体的に日本の施策を見ることができて、非常に役に立った。

▲保育園児たちと

海外出張報告

タイ ('91.10.20〜10.26)

昨年10月末、雨季がようやく終わりかけたタイを訪問した。夕刻、バンコクの空港に降り立った途端、蒸し暑い熱気に襲われた。バンコクの交通渋滞は有名だが、その日は、朝から激しく雨が降り続き、各所で道路が冠水して、日中は500メートル進むのにも数時間かかったそうだ。

バンコク市内を車で走ると、至るところで道路工事やビルの建設が行われ、一見無計画とも見える形で都市開発が進んでいる。タイの経済成長はめざましく、外国企業の進出が続いている。さらに、1997年に香港が中国に返還されるのに伴い、外国資本の移転が進み、それがタイへの投資ラッシュに拍車をかけている。タイの首都バンコクの人口は公称約600万人ほどだが、北部地方の貧しい農村地区から多数の出稼ぎ労働者が流入し、実際の人口は1,000万人を超えているとも言われている。

この巨大都市として膨張し続けるバンコクで、ある日本人研究者のメードとして働いているタイの女性から話を聞く機会があった。彼女には幼い子供がいるのだが、生活のため子供を遠く離れた田舎の両親のもとに預けたまま、離れ離れにメードとして働いているということであった。バンコク市内に保育所はあるのだが、高くてとても預けられないという。彼女のようなケースは決して珍しくないという話であった。華やかな経済成長の裏で、家族崩壊の危機に見舞われている女性たちがいる実態を知り、タイの「光と影」の部分を見る気がした。 (石田謙悟)

▲山岳民族・メオ族の小学生

シンガポール ('91.10.18〜10.26)

タイでの家族意識調査の予備調査のため、昨年10月、バンコクとチェンマイを再訪した。チェンマイでは、農村女性の収入創出活動を援助・組織化しているILOのプロジェクト現場の村に、OASC(当フォーラムのアジアセミナー受講者が結成した北九州市民のNGO)のメンバーを案内する仕事もあった。

その帰途、シンガポールに2日間滞在。ここでは、1980年代半ばごろから出生率低下が目立ち、前首相が「高学歴女性こそたくさん出産してほしい」という意味の発言をして、物議をかもしたことがあった。その後どんな人口政策・家族政策がとられ、結果はどうなのかについて資料を集めたいというのが、一つの目的だった。

もう一つは、あまり知られていないこの国での「女性学」研究の実態や、女性解放運動の団体や動きについて、何か知ることができたら、ということがあった。幸い、下関市立大学の田村慶子さんから紹介いただいたシンガポール大学日本学科の謝教授や、本誌の在シンガポール通信員である山口のり子さんのおかげで、よい結果が得られた。詳細は別に報告するとして、出生率の件では、現閣僚の一人は「家事・育児に男性も参加しよう」「男の子の家庭科教育の充実を」と発言して世論をリードしているとのこと。大きな変わりようである。また、東欧・旧ソ連邦解体の影響で、女性運動を含めて市民の自由な社会活動の空気が膨らんできたという、あるフェミニストの言葉が印象的だった。 (篠崎正美)

▲シンガポールで人気の屋台

マレーシア ('91.10.20〜10.27)

緑の美しい国マレーシア、その首都クアラルンプールは自然と人が見事に調和した活気に満ちたまちである。

昨年10月、タイのバンコクから空路約3時間で、私は市の女性海外研修団と共にクアラルンプールに着いた。2度目の訪問である。

今回、私は「FELDA(フェルダ)」という国営開拓集団農園の訪問に興味を持っていた。マレーシアは全国土の70%がジャングルで、ここを開拓して入植者を募り、国が土地を与え、自活して農業を営むことができるよう教育や資金の援助を行うという。資金は収穫が得られるまで貸与され15年で返済する。

早朝、バスで市内から2時間、ゴム園や椰子畑が深い緑の帯になって続く道をフェルダに向かった。整然と並ぶゴムの木も、日本の室内にあるのとは大違いで20mぐらいの大木であるが、葉は小さい。

フェルダの集会所では、イスラムの衣装を着けた女性たちの歓迎の手料理に旅の心がなごむ。カレー御飯に魚やいかの煮物、ゼリー等のおいしい料理を右手で食べるのに挑戦。食事のあとで入植10年目の家庭を訪問。家は高床式木造で、質素ながら手芸品もあり、家族のぬくもりが肌に伝わってくる。テレビや冷蔵庫、ラジカセが日本製なのには驚いた。子供は平均5人で重要な労働要員だという。道理で顔や目が生き生きと輝いている。豊かさとは幸せとは何か、考えさせられるフェルダの訪問であった。 (三隅佳子)

▲フェルダの高床式の家

インド('91.10.20〜10.27)

インド・ウダイプルにあるUNIFEM（国連婦人開発基金）のプロジェクトを訪問した。デカン高原の北部高原地帯にあり、こんなところにどうして人が住んでいるのか不思議なくらい荒涼としたところで、乾燥し、緑の少ない地域であった。ここでは女性の自立を助け、収入を得るための養蚕のプロジェクトが実施されている。桑の木を植え、蚕を育て、繭を取るところまでを行っている。繭は、他のUNIFEMが関係しているプロジェクトにおいて絹糸に紡がれている。予想したよりも小さなプロジェクトではあったが、ここでは、UNIFEM、州政府、NGOが一体となって取り組んでおり、各組織相互の連携が非常にうまくいっている。このプロジェクトでは、単に収入増を図るだけではなく、子供たちの教育を実施し、栄養改善と食料確保のために桑の木の間に野菜を植え、あるいは、竹を植えて養蚕に必要な道具を作るなど、さまざまな問題の解決にも同時に取り組んでいる。

そのNGOの代表者は、「援助では、まず第１に、彼らのライフスタイルや長所・短所を知ることが必要であり、次に、彼らの方法で何をすればよいかを考えることが重要である」「収入の増加が生活の改善につながらなかったこともある。そのときには、彼ら自身が話し合い、分析し、解決の方法を見出した」と語った。

援助を考えるときには、このように援助を受ける側の文化や生活に立脚し、その人たちが自らの力でよりよい生活を実現できるような配慮をする必要性を痛感した。（小田昭裕）

▲繭から糸を紡ぐ女性たち

旧ソ連('91.11.8〜11.15)

環日本海交流の課題と展望を探るための委員会メンバーの一人として旧ソ連極東を訪問したのは、昨年の11月である。九州という地理的条件ゆえに、アジア交流を考える際に死角になりがちだったソ連極東に目を向ける貴重な体験であった。

後日分かったことではあるが、この時期は、ソ連邦解体のわずか１か月半前であり、図らずも私たちは、歴史の大きな転換期に立つソ連を見たことになる。そういえば、官公庁などの建物の屋上にひるがえる国旗は、すでに、白・青・赤のロシア共和国国旗だった。

急激な社会・経済体制の変化の中で、女性たちの苦悩もまた大きいようだった。ウラジオストクの女性リーダーからは、社会主義体制下では、男女平等の雇用機会が保障されていたが、企業の民営化によって女性の離職が多発する状況にあることや、ソ連は離婚率が非常に高く、離婚した女性の生活や子供の養育の問題も深刻であることなどの話を聞いた。

しかし、女性のバイタリティーはすごい。彼女たちは女性団体を組織化し、女性自身の力で問題解決に取り組んでいるという。

その日、ウラジオストクの丘の上から見た日本海は、コバルトブルーに輝き、鉛色をした日本の冬の日本海とは全く違う様相を呈していた。この海の向こうに日本があるという。彼女もまた、国や体制にかかわらず、女性同士の連携の必要があることを強調し、日本との交流の可能性を探っていた。（神崎智子）

▲ウラジオストク・金角湾を臨む広場

フィリピン('92.3.2〜3.7)

フィリピンの女性のための職業訓練施設を訪ねた。生活の自立を目指す女性たちに職業訓練の機会を提供しようと刺繍、染色、洋裁、ジャムづくりなど生活に身近な技術を磨く講座が開かれていた。修了後は就職したり、自営業を営んだりして技術を生かすのだという。使命感にあふれた局長は、力強くそのように説明してくださった。

話をお聞きするうち、JICAの援助プログラムであることも分かった。JICAのプログラムにこのようなきめ細かなプロジェクトがあることが分かってうれしく思った。完成品は売店で販売されていた。バッグ、人形、ぬいぐるみなど、魅力的な手作りの品がぎっしり。私も思わずバッグを買ってしまった。帰国後、団員の一人は、デザインの参考になればと、北九州の保育園の先生の手作りの人形を、たくさん送った。

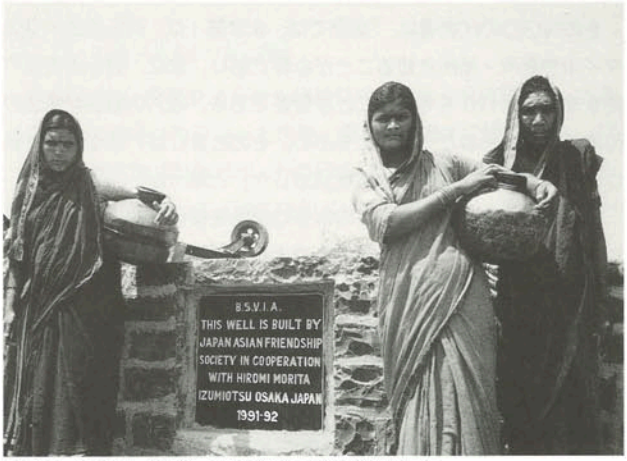
「人に会って、話して、身体を動かすと幸せになるものです」と私たちを迎えてくれた人もいた。また、打ちとけるにつれ、過去の歴史のこと、じゃぱゆきさんのことなど厳しい現実の話にも及んだ。

今、私は「世界は、両親が私たちに残してくれたものではなく、子供たちが私たちに貸し与えてくれているものである」という言葉を思い起こしている。

とすれば、私たちには一つでも多い出会いと対話が今、必要なのだろう。できるところから一つ一つ。（寺田和子）

▲職業訓練施設で販売されている民芸マット

㈳アジア協会アジア友の会（JAFS）



▲インド・グッディーハラ村―完成した井戸で水をくむ女性たち

本会の目標は、「より人間らしい地球社会の創造」を標語に、アジアの草の根の交流と協力・連帯を通して、欧米と比して横のつながりの弱いアジア地域にあって活動するNGOのネットワーク化を目指すことにある。

インドで、エリートとしての生活を投げ打ち、民衆の生活向上に草の根レベルで尽くすことを決意した青年がいた。JAFSの活動は、この青年のインドでの活動を支援する形で始められた。会としての最初のキャンペーンが「インドに井戸を贈る運動」として新聞紙上で紹介されたのは、1979年10月のことであった。

「井戸」というテーマを決めるにあたっては、現地との間で十分に話し合いがなされた。一過性の援助ではなく、長期間にわたって有効なもの、そして、村の人びとを自助自律に導くもの。言うまでもなく、井戸の効用は安全な地下水の供給（開発途上諸国での疾病の7～8割が不衛生な水に起因すること、ことに乳幼児の死因の最大のものがこれに起因する下痢であることを思い起こしてほしい）にとどまらない。まず、井戸建設労働として村の中に雇用を起こし、村人の共働の意識を高める。村の中に井戸ができることによって、女性や子供たちはそれまで1日の最大の労働日課であった遠方への水くみから解放され、その余った時間を職業、初等教育等に回すことができる。伝統的に虐げられた立場にあった女性や子供たちは、教育を受けることにより村の貧しい現状を未来に向かって変革していく力を持つのである。

その後、国連が1981-1990年を「水の十年」と規定し、活発なキャンペーンを展開したが、時期を同じくしてJAFSの活動の範囲も拡大した。バングラデシュ、インドネシア、タイ、ネパール、フィリピン等で水供給のプロジェクトが行われ、さらに、植林、トイレ建設などさまざまな形で農村開発が行われるようになった。

現在、JAFSの国際ネットワークはアジア12か国に広がっている。このネットワークは互いに「環境破壊なき開発」、「市民レベルでの国際交流」、「次世代を担う青少年の育成」を共通のコンセプトとして活動している。特に後二者に関してはさまざまな国際ワークキャンプやセミナーを開催、日本からも数多くの若者が参加するが、近年は女性の参加者が男性を上回っているのが目立つ。また、女性たちの抱える問題については1990年、インドネシアで第1回アジア国際女性会議を開催、ネットワークの中での女性たちの連帯を強めた。

JAFSについての詳しくは、(06) 444-0587まで。

海外通信員レポート

バイク女

王　静さん〈中国〉

2月のある日の午後、上海の一番にぎやかな通りである南京路を、真赤なコートを着た若い女性が高級二輪車に乗って走りました。後ろの座席には男性を乗せていました。女性の二輪車ドライバーが上海の街頭に現れることは日に日に増えるようになり、かつては男性だけだった二輪車行列の中に女性が目立つようになりました。

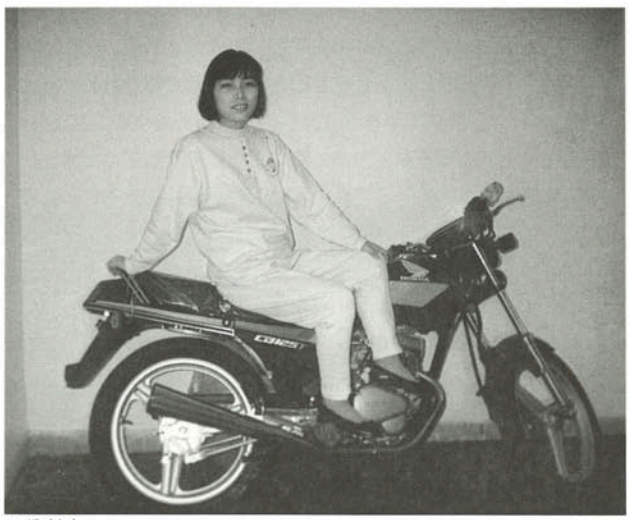
1991年の上海交通管理部門の統計によると、現在上海で二輪免許を持っている人は約2万人、そのうち女性は400人近くであるそうです。女性の免許保持者のうち40歳以下の人は300人で、職業は、大学の教授からサーカスの俳優までさまざまです。世間では彼女たちのことを「バイク女」と呼びます。女性が二輪車運転に仲間入りすることは、男性に負けずに競り合おうという意味も示しているようです。

生活が豊かになるにつれて、人びとが求めるものも変わります。中国では二輪車が日常生活の中に入ったのはわずか5～6年前のことです。二輪車は普通のサラリーマンの家庭にとっては車と同じくまだまだ贅沢品です。しかし経済的にゆとりがある家庭で、両親が許せば、娘も自然に乗りたがるようになり、また、女性が乗るのは珍しいから、それにチャレンジして、乗ってみようという人もいます。

著名な骨科専門家陳中偉医師の夫人殷慧珠医師は、バイク女の中で最も年取った一人です。夫人の友人の話では、今年63歳の殷先生はバイクを通勤用として利用していますが、スピードはそんなに出さず、ときには陳先生と一緒にドライブもするということです。

上海雑技団には7人のバイク女がいます。女優の趙冬娟さんは「男が乗れるなら、私たちも乗れる」と言い、同じ女優の陳琴芳さんは「私は二輪車に乗って走っていたときに、男のドライバーから変な目つきで見られたことがありますが、それでも私は男には負けたくないと思います」と言っていました。

バイク女の行列はまだまだこれからも広がるでしょう。町から田舎へ。田舎でも近い将来このような光景が見られると思います。今日もいろいろな職業のおよそ70名の女性たちが、二輪車免許を取るために教習所に通っています。やがて彼女たちはさまざまなタイプの二輪車に乗って、上海の町を走るようになるでしょう。



▲バイク女

事業報告

トーク「女たちのアジア」北九州

トーク「女たちのアジア」北九州 が平成4年(1992年) 4月11日(土)に北九州国際会議場で開催され、約600人が参加しました。

この会議は、「アジアにおける女性の地位向上、平等、開発、平和のために貢献する」ことを目的に、1985年のフィリピン会議に引き続き今年日本で開催された「アジア女性会議」の地方展開として開かれたもので、北九州を始め全国六つの都市で開催されました。

北九州のテーマは、「語ろう・つなごう　女たちのアジアを」。

ニューヨークで活躍中のスリ・ランカのヘマ・グーナティラケさんによる力強い基調講演を封切りに、「バンコク・闇の花」のスライドを上映、午後からは、ヘマさんを始め本会議のために来日のインドのリタ・モンテイロさん、インドネシアのタティ・クリスナワティさん、パキスタンのファレッハ・ザッファさんをゲストスピーカーに迎えて、開発、メディア、環境、労働の4テーマについて分科会が行われました。引き続きティー・パーティーが開かれ、ウイグルの歌と踊りのアトラクションも交え、交流の輪が広がりました。

▲ゲストスピーカーへの記念品贈呈

今年6月、ブラジルで「環境と開発に関する国連会議（地球サミット）」が開催されるなど、今、地球規模での環境保護の問題が注目を集めています。「女性と環境」の分科会では、ゲストスピーカーのタティさんが、「地球資源枯渇の主たる原因は人口増加ではない。これまで人口増加を抑制するために子供の数を減らすことに力が注がれ、出産に関する女性の自主性は考慮されず、結果として女性に負荷をもたらしてきた。真の豊かさを追求するためには、女性を取り巻く状況を見直し、生活のあらゆる事象に女性自らが決定権を持って対処していく力をつけていくべきだ」と訴えました。

また、西南女学院短大教授の大里克夫さんは、本当の豊かさとは何かを問いながら、消費第一の考えは捨て、「地球の資源を地球人類の共通のものとして大切に用いることを真剣に考える必要がある。資源を大切にすることは人の生命を大切にすることにつながる」と指摘しました。

フォーラムの窓

Heart-Link

アジアをつなぐ女性たち

「あなたがいる
わたしがいる
ここに　いま集う　充実
言葉を　超えるとき
思いが　寄り添うとき
In Sisterhood
Heart-Link　Heart-Link
こころ　深まる　このとき」

落合恵子さんの素敵な詩、「Heart-Link 心つながるとき」の詩の一節。1985年、フィリピンのダバオ市での開催に引き続き、アジア各地と日本全国をネットワーキングして開かれた、「第2回アジア女性会議」に寄せられたメッセージである。

4月2日～4日、埼玉の国立婦人教育会館の本会議には、アジアの十数か国から18人の若い女性活動家を中心としたゲストスピーカーたちが、それぞれのグループやネットワークを代表して参集。日本ではAWRAN(アジア女性研究と行動のネットワーク)JAPANの船橋邦子さんが実行委員長となって、アジアの女性たちの連帯に心を寄せる多くの人びと、機関、企業を組織化され、準備に奔走された。

埼玉での本会議だけでなく、横浜、仙台、堺、広島、北九州、大阪と、まるで桜前線と戯れるつむじ風のように、ゲストスピーカーたちは、「地方会議」にも出席してくださった。日本中が「女たちのアジア」を創り出そうという意志と心でつながれていった。

さて、埼玉の本会議の12の分科会で、私は「アジアの女性学」に参加した。言語や宗教、政治体制その他、「多様性」そのものであるアジアであるのに、「アジアの」とくくって女性学を考えることの意味は何なのだろうか。それは必要であり可能なのだろうか、という疑問が、私をこの分科会に向かわせた。

この点に関し、スリ・ランカのヘマ・グーナティラケさんの話は明快でかつ鋭かった。フェミニズムの主要な点は、女性が抑圧されているという意識、またこれを変えようという意識である。1960年代のアメリカにいるとき、アメリカのラディカル・フェミニストたちの、女性の解放とはこうした家父長制との闘いであり、それーつだという主張に取り囲まれて、「アジアでは違う！」と感じた。スリ・ランカを含めアジアでは、男も女も、貧困との闘い、これを放置または強めて自己維持を図ろうとしている支配層からの抑圧がある。そしてこの貧困と抑圧の構造は、国際的な経済秩序の中で、先進国と第三世界との「不平等・不公正な」関係を通じてより強められている。さらに女性たちには、その上に家父長制からの差別がある――と。

日本では、私たちのいわゆる繁栄や富は、勤勉さや集団主義的組織力、科学技術革新への知的探求といった、つまり自分自身の努力で得たものとして説明し、事足れりとする風潮が強い。確かにそれはそうだとしても、こうした努力が、地球上で「共に生きる」人びととのどういう関係の中で可能になっているのかについて、心を開いて自問自答することが求められている。明治維新、第2次大戦後に続いて、日本では女性たちの主導で、第3の開国＝Heart-Linkの国際化を始めるときである。

アジア女性交流・研究フォーラム
主席研究員　**篠崎　正美**

INFORMATION

●第3回アジアセミナー

アジア女性交流・研究フォーラムでは、皆さんにアジアについて理解を深めていただくために、平成4年(1992年)6月～8月に公開セミナーを開催します。

現在、女性の地位向上のために、「開発と女性」への積極的な取り組みが求められています。セミナーでは、「開発と女性」の問題の中で、とりわけ、深刻化し国際的な関心の高まりがある環境問題や家族、教育、経済の問題について講義を行います。

このセミナーを通して、アジアの国ぐにの女性が置かれている状況や、開発を進める担い手としての女性の存在を認識することによって、アジア諸国の開発に果たす女性の役割を考え、また、同時に、これからの私たちの役割についても考えていきたいと思っています。

皆さんの参加をお待ちしています。

詳しいお問い合せは、フォーラム (093) 551-1220まで。

●日韓共同研究報告書発行

フォーラムは、平成3年(1991年)度の主要事業の一つとして、韓国女性開発院と共同で、都市部における家族意識の変化に関する日韓比較研究を行い、このほど報告書を作成しました。

報告書は、開発が女性と家族に与える影響を、女性の役割分担、生活における価値観、男性の意識など幅広い角度から考察し、両国の特殊性や共通項を分析したもので、日本語版と英語版を同時発行しました。

詳しいお問い合せは、フォーラム (093) 551-1220まで。

※Asian Breezeに対するご意見やご感想をお寄せください。

※掲載記事などの無断転載・複写を禁じます。

●"Asian Breeze"定期購読受付中

"Asian Breeze"は、北九州市広聴課、各区市民相談室などで無料で配布しています。また、ご希望の方には、直接郵送による定期購読を受け付けますが、この場合は送料をご負担いただきます。

お申し込みは、フォーラム(093)551-1220まで。

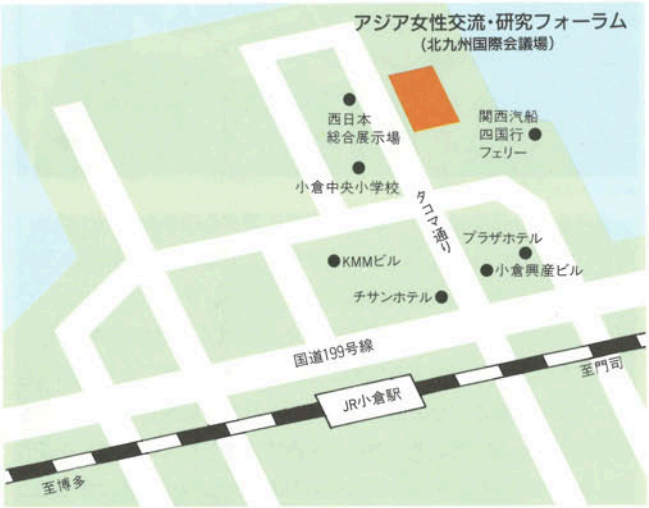
編集後記

編集部への手紙がめっきり多くなりました。韓国から、中国から、ネパールから、オーストラリアから、クック諸島から……。

Asian Breezeを通して情報を共有し、交流の輪を広げていくことの喜びを、一通ごとに実感するこのごろです。 〈S〉

初夏です。

生まれたてのまばゆい新緑、芽生えの季節に心躍らせながら、改めて四季の移りゆく様に不思議な感動を覚えます。トーク「女たちのアジア」の春一番も、さわやかで、力強い風でした。 〈K〉



KFAW
アジア女性交流・研究フォーラム
〒802 北九州市小倉北区浅野3丁目9－30 北九州国際会議場8F
PHONE(093)551－1220 FAX(093)551－7535